

IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 167, 2014

VIEW 展望

脚本が読める八百屋がいてもいい—今村昌平は映画教育を思考する／土田環…2

INFORMATION 学会組織活動報告

研究企画委員会…3-4 機関誌国際版『ICONICS』編集委員会…4
支部・研究会だより 関西支部…4 映像表現研究会…5 東部支部…6
ビデオアート研究会…6-7 映像テキスト分析研究会…7
映像心理学研究会・アニメーション研究会…8 映画文献資料研究会…8
西部支部…9 中部支部…9 ショートフィルム研究会…9-10

REPORT 報告

関西支部第72回研究会「スクリーンの拡大とその余波—ワイドスクリーン映画の導入にともなう撮影様式の変化について」／北浦寛之…5

FORUM フォーラム

ショートショートフィルムフェスティバル&アジア 大阪 2014…10

FROM THE EDITORS

編集後記…10

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第167号」2014年7月1日発行
発行人: 豊原正智 編集担当 / 総務委員会 [第20期]: 古賀太(委員長)・遠藤賢治・
伏木啓・末永航・石坂健治・小出正志・仲本賢

日本映像学会事務局: 176-8525 練馬区旭丘 2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内
phone: 03-5995-8287 / fax: 03-5995-8209 / e-mail: JASIAS@nihon-u.ac.jp

<http://jasias.jp/>



日本映像学会

脚本が読める八百屋がいてもいい —— 今村昌平は映画教育を思考する

土田 環

日本映画学校は、
人間の尊厳、公平、自由と個性を尊重する。
個々の人間に相對し、人間とはかくも汚濁にまみれているものか、
人間とはかくもビュアなるものか、
何とうさんくさいものか、
何と助平なものか、
何と優しいものか、
何と弱々しいものか、
人間とは何と滑稽なものかを真剣に問い、
総じて人間とは何と面白いものかを知って欲しい。
そしてこれを問う己は一体何なのかと反問して欲しい。
個々の人間観察をなし遂げる為にこの学校はある。

(今村昌平、1975)

映画監督・今村昌平が掲げた映画教育の理念とは、今日では鬱陶しいとさえ感じるまでに極度な人間中心主義にほかならない。同氏の創設した映画学校を前身とする大学へ一年半前に着任してから現在に至るまで、「人間」という言葉に居心地の悪さを感じ続けてきた。たしかに、大半の映画は人間を描き、彼らの紡ぎ出す物語を語る。だが、殺伐とした風景のみが延々と映し出され続ける映画があってもいい。モノしか登場しない作品のどこが悪いのか。映画人を送り出そうとする建学の精神が、甘たいヒューマニズムを助長しているように思えてならなかった。そもそも、自分以外の人間にあまり興味がないからだろうか。今村の言葉を撮る側の論理に置き換えてみても、その印象は変わらなかった。一人で映画を撮ることはできないと言われても、メカスは？個人映画は？と抗弁したくなってしまう。スタッフ間の信頼やその統率がそれほどまでに大事なものであるのだろうか。暴君のように映画監督の振る舞う現場から生まれた傑作もある。むしろ、映画教育は、あえて人間から目をそらして、モノとしての映画を思考するべきではないのか……。

映画・映像教育の側へ議論を少しずらして考えてみれば、人間の観察と理解を軸とする今村の理念に対する腑に落ちない私の思いは、例えば美術大学や映画学科のような教育機関や組織のなかで、映画監督や映像作家なるものを教育し育てることができるのか、という問いと共振するのかもしれない。映画教育は何を目指すべきなのか、「映画のための教育」なのか、「映画による（人間）教育」なのか、という議論である。映画監督は「なる」ものであり、育てるものではないという意見は、根深く存在する。定められた技術を修得し、資格を取るといった職能訓練的な教育だけが映画教育ではないことは誰もが分かっており、映画学科で学べば、映画人として生きていくことのできる方法がそのまま身につくわけでもない。そもそも、作品とは、技術論の上にもみ成立するものでもなければ、そのようにして学ばれるものでもないのだ。だとすれば、映画学科の

学位とは何のために存在しているのだろうか。それは、ひとつの学習の目標とはなり得ても、将来の何かを保証してくれるわけではない。だからといって、映画監督になろうとする人々のために、学ぶ場を構築すること自体が不可能だということもないはずである。

「脚本が読める八百屋がいてもいい」という名言を今村は残した。一見すれば、その教育観は、「映画による（人間）教育」を志向し、従来の教科教育の枠組みではすくいきれない人間形成やコミュニケーション能力の向上といった側面で映像教育の活用が期待される現在に対して、一定の答えを与えているように思われる。映画というメディアが、個性の多様化、あるいは、文化的教養を示す象徴であるかのように。だが、達成の度合いを明白に要求される職能教育とは異なるとはいえ、映画はただの教育の「手段」なのだろうか。映画や映像を観た際の驚きや、それを作る楽しさは、教育の効果として説明できるものではない。映画を学ぶ側の人間的な成長は、あくまでも、事後的に副産物としてもたらされるものなのである。「映画は社会の鏡である」といった考えを否定するつもりはない。メディア・リテラシーにもそれなりの効用はあるだろう。しかし、映画を個別の役割に還元してしまえば、かえって、映画にとって固有なものは失われてしまう。映画そのものから出発する思考のあり方が、そこでは忘れられている。

私たちは、教育において「個性」「感受性」「自己表現」といった言葉にとらわれすぎてはいないだろうか。戦後民主主義のなかで、芸術教育は、人間の内面的成長と表出の行為において重要な役割を果たすと信じるあまり、芸術に触れる私たちの感動を無条件に前提とし、強制してきたように思われる。そして、職能教育の一方で、情緒を育み自分らしさを磨くための情操教育、そして、今日におけるキャリア教育……。目的志向型の教育制度の下、本末顛倒というべきか、芸術が学校教育のなかに入ったことで、逆に、美術嫌いや音楽嫌いを生み出したとしても仕方あるまい。

「人間」という言葉は、今村にとって、内面から緩やかに形成される人格を示すでもなければ、馴れ合いながら多様に共存するだけのものでもなかったはずである。「汚濁にまみれ」つつ「ビュア」で、「うさんくさ」く、「助平」な、露となった生々しい欲望の総体こそが、そこにはイメージされている。やや強引に議論を進めれば、かくも「優し」く、「弱々しい」、「滑稽」な姿を機械にほかならないカメラでとらえることにより、私たちは既存の認識の枠組みをいったん外して、目の前の存在とその欲望に向き合うのだ。そこにいわゆる人間はいない。映画という欲望の装置に放り出された剥き出しの「生」がある。だからこそ、人は、豚にもなれば昆虫にもなり、脚本家にもなれば八百屋にもなる。映画教育の可能性は、映画のまとう具体的かつ物質的な表情に欲望し、感応することからしか始まらない。

(つちだ たまき / 日本映画大学)

研究企画委員会

相内 啓司

2013年度研究企画委員会を締めくくるにあたって

2012年の9月研究企画委員長に就任以来、この期の研究企画委員会はタスクを研究会活動の活性化を図ることに照準を定め、その目標達成に向けての模索を始めました。まずその前提として研究企画委員会による研究会活動の実態の調査、把握を行なうとともに、研究会全体の統括を行なうこととしました。その結果活発な活動を継続している研究会がある一方で、長期間活動が停止状態にある研究会が複数あるという実態が浮上り、本学会の研究活動の一端を担うべき研究会組織のあり方自体やその運営に深刻な問題があるという認識に至りました。

次にこのような状況をふまえ、研究会活動の活性化を図るための具体的な方策として以下の2件を研究企画委員会の懸案として理事会に提言し、その後の承認を得て実施することとなりました。

- 1: 研究会の再編成（研究企画委員会に直属していた研究会の解消。当該の研究会及び各支部に所属する研究会の再登録の手続き。新規発足の研究会の登録）
- 2: 研究会活動助成金制度の発足（研究会活動助成を奨励する一貫として公募制の助成金制度を創設）

その結果以下の報告に上げるように、この2件の懸案の実施が行なわれ、ほぼ当初の意向に添う形で再登録申請、新規発足の研究会の登録、および助成金への応募が多くの研究会からなされました。またその後学会報やWeb上の告知にも見られるように活発な研究会活動の報告も増え、概観ではありますが一定の成果が確認できるのではないかとというのが、[第20期]研究企画委員会としての現在の見解です。

研究会活動の活性化は各会員の研究意欲によって支えられるものであり、また実績を積み重ねてゆく機会となるとともにその活動内容は学会の学術的レベル、そして表現領域でのレベル等の指標となるものです。今後もさらに研究会活動の活性化を期待したいものです。

今後の企画・運営方針は2014年度[第21期]研究企画委員会にゆだねられることとなります。

蛇足ではありますが、ここに改めて[第20期](2012～2013年度)の研究企画委員会の発足の経緯を含めた活動報告をしたため、またそこに含まれる種々の課題が会員のみならず共有されることを望みながら、以下にその概略を報告させていただきたいと思っております。

●委員長の選出の経緯：2012年5月前研究企画委員長・太田曜氏から私に研究企画委員長就任の要請がありましたが、委員長の選出にあたっては研究企画委員会による選挙で決めるべきだという提案をした経緯があります。また、候補者は委員会の企画運営に関しての指針を示す趣意書を提示すべきではないかと提案しました。

以下はその際に相内が提言した「研究企画委員会運営についての基本的な考え（趣意書）」の概略です。

●研究企画委員会運営についての基本的な考え

『はじめに：—中略—そもそも理事会の直属機関として機能する研究企画委員会はどのような理念のもとに組織され、何を企画し、運営するのか、あるいは所属する各研究会との関係においてどのような機能を果たすのかなどという点についてこれまであまり議論されてこなかったのではないのでしょうか。—中略—

本委員会においてはまず、愚直にこのような点についての議論を起し、基本的な立ち位置について可能な限り明確なイメージを描き、それを共有し実際の運営に反映させることが必要ではないかと考えます。

—中略—

1：研究企画委員会の理念について考える（理念は以下に挙げる本学会の設立の趣旨に準ずるものです）

「既存の媒体を対象とする学問的研究を超え、映像という共通の問題意識を大切に、人間と社会の未来について、自由な討論と関連な研究の場をつくり出すことです。閉ざされた研究、限定された交流ではなく、あくまで開かれた視点に立つ総合的思考—これこそ今日の文化的要請に応え、本質への問題提起を行う姿勢ではないのでしょうか」とあります（下線は相内）。

上掲の趣旨は映像研究について考えようとする者にとって、それぞれのおかれた時代状況においてどのような問題を大きくとらえるべきであるか、また逆に具体的な状況と照らし合わせる時どのような問題が個別の課題として議論されるべきなのかを示唆する内容が含まれているように思えます。たんに機能としての委員会ではなく、理念を持つ研究企画委員会としてイメージが共有されるならば自ずと何をなすべきかという方向性もイメージされるのではないのでしょうか。

2：研究企画委員会の目的・機能について考える

a: 研究企画の発案、および会員からの提案事項についての検討：学術的研究者、制作者・表現者の双方にとって利益をもたらす研究企画をとりあげ、映像研究、映像表現に関する発案内容について討議、検討する。優れた内容を持つものについては研究会の組織化やその運営を奨励する。—中略—

b: 研究企画委員会に所属する各研究会の活動状況の把握：所属する各研究会については申告制により活動状況を把握する。その結果に基づき、適正な運営について討議し、活性化を促す。運営についての適切な活動状況が一定期間確認できない場合にはその存続の意義を問う。

c: 後進の研究、制作の支援：学会に所属しているか否かをこえて学生、若手の研究者、表現・制作者の研究・活動について活性化を図る機会を設ける。

3：研究企画委員会の運営についての確認—調整—中略—

a: 基本的な構成メンバーは理事の中から選出される。

b: 委員会の開催：必要に応じて随時委員会を開催し、懸案事項について討議し、必要に応じて結論を出す。

4：委員長の選出の仕方について検討する。

①自薦・他薦で候補者を決める。→②候補者は委員会運営に関する基本的な趣意を表明する→③選挙—中略—

*研究企画委員による選挙の結果、相内が[第20期]研究企画委員長に選出されました。

5：研究企画委員会の独自の企画によるプロジェクト（事業計画）について

—中略—例)かつて、企画されては実現されなまま流産してきた「映像学事典」、「映像学ハンドブック」（いずれも仮称）があります。企画内容の検討もされたこともありますが、執筆者の選定や種々の都合でいずれも実現していません。—中略—その意義や内容の検討、実施を含め「〇〇」編集研究委員会などを組織して、委員を募り実現を模索するのが適当ではないかと思っております。（ここには長期間、形骸化した研究企画委員会のあり方への批判が含まれていません）

●2013年度の事業報告と課題について

①研究会活動に関する提案の骨子

A: 研究会活動の更なる活性化と公開性を図るとともに情報の共有化を図る。

a-1: 研究企画委員会に所属する研究会、各支部に所属する各種研究会、および新規に発足する研究会を含め、本学会に所属し活動することを求めるすべての研究会の活動、およびその運営を研究企画委員会が統括する。

a-2: 各支部の中にありながら、学会に所属する研究会として公認されていない分野や、地域の研究活動の活性化を図るために新規の研究会の発足・登録を公募する。

(e.g. 若手研究者の支援のための研究会、映像に関する新分野の理論研究、歴史的研究調査、海外交流研究、北海道、東北、沖縄など地域における研究活動)

a-3: 各研究会は公開性の観点から研究活動状況、内容等の報告を行なう。

a-4: 活動状況に関して学会報、webなどを活用し情報の共有化を図る。

B: 学会が各支部に配分する従来の研究会費を改め、研究会運営費とし、各研究会活動の運営に必要な費用に限定する。(e.g. 会議会場賃借費用、連絡費、外部講演者への謝礼、通訳料、資料等のコピー・印刷費用、調査費など必要最低限のもの。*ただし、制作費、個別の研究そのものに関する費用等は含まない)

b-1: 公募形式の研究会活動助成金制度を新設する。

b-2: 研究会運営費、および研究会活動助成金制度は総務が一括して管理し、研究会活動助成金に関しては研究企画委員会の審査を経て、理事会で承認

機関誌国際版『ICONICS』編集委員会 板倉 史明

された場合、その適正性に依りて各研究会に配分される。

b-3: 研究会活動助成金の申請に関しては研究企画委員会が主宰する審査委員会が一括して、審査を行なう。

b-4: 研究会活動助成金の配分は年度毎に行なう。

b-5: 研究会活動助成金が配分された研究会は年度内に活動状況、内容等の報告書、および会計報告を提出し、運営費の適正性について研究企画委員会、および総務の審査を受けなければならない。なお、適正性が認められないものについては返還しなければならない。

* 各項目の検討事項については今後の課題とする。

② 2013年度の「研究会登録申請」の件数 (12)

研究会名: 「ショートフィルム研究会」(中部)、「関西支部夏期映画ゼミナール」(関西)、「映像表現研究会・西部会」(関西/西部、中部会員含む)、「ビデオアート研究会」(東部)、「アナログメディア研究会」(東部)、「映像心理学研究会」(東部)、「アニメーション研究会」(東部)、「クロスメディア研究会」(東部)、「映像テキスト分析研究会」(東部)、「映像理論研究会」(東部)、「映像表現研究会・東部会」(東部)、「映像文献資料研究会」(東部)

③ 2013年度の「研究会活動助成申請」の件数 (5件)。採択件数 (5件)

「ショートフィルム研究会」、「関西支部夏期映画ゼミナール」、「映像表現研究会・西部会」、「ビデオアート研究会」、「アナログメディア研究会」

● 2013年度末の報告事項・及び2014年度への引き継ぎ

① 新規の「研究会登録申請」(2014年度)の公募を引き続き継続する。

② 2014年度の「研究会活動助成申請」の公募。(応募期間: 2014年2月1日～3月31日) *2013年度[第20期]研究企画委員会が任期中のため公募、および審査を行なった。

* 総額 ¥500,000 ~ 540,000 程度

予算額 A: ¥150,000 (2件程度)

予算額 B: ¥80,000 (3件程度)

* 「研究会活動助成申請の採択にかんする審査委員会」(2014年5月24日(土) 12:00～14:30)が開催された。

審査結果を2014年5月24日の合同理事会に審議事項として提出し、承認された。

* 2014年度申請件数(5件)採択件数(5件)

「アナログメディア研究会」、「ショートフィルム研究会」、「映像表現研究会・西部会」、「映像文献資料研究会」、「関西支部夏期映画ゼミナール」

● 今後の課題: (*以下の項目について必要なものについては応募要項に明示する)

a: 申請時に予算書(概要)添付することを明示する。

* 支給金額については調整の可能性がある。

b: 申請書のフォーマットを限定的に公開する。

(申請希望者を事前に受け付け、サンプルを公開する)

c: 公募情報をMLで告知する。(2～3回)

d: 学会報、大会などで報告をする際に「日本映像学会研究活動助成金対象研究」とクレジットに明示する事を義務化。

e: 助成金の使途に講師料がある場合制限を加えてはどうか。

(¥10,000程度。学会の内規: 外部講師の上限は ¥30,000)

f: 取支決算の提出を徹底する。

g: 審査結果及び、審査委員名を学会報で公開する。

* 2015年度の「研究会活動助成申請」の公募: 次期研究企画委員会が行なう。

* 研究企画委員会の開催: 4回程度(2014年度)。

以上の検討内容については次期委員会にゆだねる。

以上をもちまして2013年度の研究企画委員会の報告といたします。

* 経過報告を含んでいるため、時系列的に内容に多少の重複や、説明不足や整合性に欠ける点があることをお詫びします。(文責: 相内)

(あいうち けいじ/研究企画委員長[第20期]、京都精華大学芸術学部・大学院)

今期は予定通り『ICONICS』第11号を2014年3月末に編集作業を終了し発行することができました。まずは編集委員の皆様はじめ、編集にご協力いただいた方々にお礼を申し上げます。

今号の課題および前号からの変更点として以下の点があげられます。海外委員と招待論文を廃止したこと、毎年の発行を目指すこと、ウェブ上のみで刊行すること、欧文に翻訳すべき過去の『映像学』論文を選定する「優秀論文」を1本から最大3本に増やすこと(1本につき最大5万円の翻訳校正補助費を学会から支出できるようにしました)です。

結果として、論文募集の告知から締め切りまで半年ありましたが、投稿論文は1本のみとなりました。また「優秀論文」を編集委員会で3本選定しましたが、投稿された欧文に対する査読の結果、掲載が認められたのは2本のみで、残り1本は次号に見送りとなりました。最終的に「優秀論文」の欧文版2本が最新号に掲載されました。また当初ウェブ上のみでの刊行という計画で進めておりましたが、今回は移行期ということで、今号まで印刷版も発行することになりました(現在ウェブ上への掲載準備を進めております)。またウェブ上の掲載については、電子ジャーナルのプラットフォームとして知られているJ-STAGE(独立行政法人科学技術振興機構)への登録申請をしましたが、過去の号における掲載論文数の少なさや学会誌の体裁の不備(論文概要がっていない)などの理由で残念ながら不採択となりました。

反省点と課題としましては、投稿数を増加させるために論文募集の告知をより積極的に行う必要があったと思います。また投稿数を増やすための方策としては、「論文」以外の「研究報告」や「書評」など投稿枠を広げることも検討してはどうかという意見もできました。またJ-STAGE登録という目標を達成できなかったことは学会員の研究成果の発信場所を獲得できなかった点において、編集委員長としてお詫びいたします。また「優秀論文」の欧文翻訳および校正作業を、より効率的に行うための方法を模索したいと思います。これらの反省点と課題を次期の編集委員会に申し送り、今期の活動を終了したいと思います。どうもありがとうございました。

以上

(いたくら ふみあき/機関誌国際版『ICONICS』編集委員長[第20期]、神戸大学大学院国際文化学研究所)

支部・研究会だより 関西支部

大橋 勝

関西支部では橋本英治会員のお世話により、下記の通り関西支部第72回研究会を開催致しました。

日時: 平成26年5月10日(土) 午後2時より

会場: 神戸芸術工科大学3号棟クリエイティブセンター 2F(3204教室)

研究発表1: 研究発表1: スクリーンの拡大とその余波 ―ワイドスクリーン映画の導入にとまなう撮影様式の変化について

発表者: 国際日本文化研究センター 北浦寛之会員

研究発表2: 「回遊する思考: 山口勝弘展」からみる創造的行為について

発表者: 甲南女子大学メディア表現学科 八尾里絵子会員

今回は12月に大阪芸術大学にて第73回研究会と関西支部総会を開催する予定です。また第34回を迎えます夏期映画ゼミナールを下記の要領で開催いたします。例年の関西ゼミナールハウスで泊まり込みという形式ではなく、京都文化博物館での開催となります。

開催日: 9月5日(金)、6日(土)、7日(日)

会場: 京都文化博物館

テーマ: メロドラマの世界―その歴史的意義と展望―

上映作品: 『金色夜叉』(野村芳亭、1932年)、『愛染かつら』(総集編、野村浩将、1938年)、『暖流』(吉村公三郎、1939年)、『また逢う日まで』(今井正、1950年)、『命美わし』(大庭秀雄、1951年)、『古都』(中村登、1963年)、『濡れた二人』(増村保造、1968年)

シンポジウム・パネリスト: 西岡琢也(シナリオ作家、大阪芸術大学教授)、中村聡史会員、他

詳しいタイムスケジュールが決まり次第、追ってご案内いたします。

(おおはしまさる/関西支部担当常任理事[第20期]、大阪芸術大学)

スクリーンの拡大とその余波 —ワイドスクリーン映画の導入に ともなう撮影様式の変化について

北浦 寛之

本発表では、わが国で1957年より始まったワイドスクリーン映画の製作に対して、従来のスタンダード映画との比較から、撮影あるいは演出にどのような違いが確認されたかを、事例を挙げながら明らかにしていった。

アメリカではすでに1953年に20世紀FOX社が、シネマスコープというワイドスクリーンの規格を公開していたが、日本でも同様に、東映スコープや東宝スコープなど各社とも自社の名を冠したスコープ映画を次々に発表していく。スコープ映画は従来の縦横比1:1.37だったスクリーンが、アナモフィック・レンズという特殊なレンズの効果で、縦横比1:2.35とおおよそ1.7倍横に拡大したものであり、同時代勃興していたテレビ対策として考案された。しかしながら、こうしてテレビと差異化を図るため開発されたスコープ映画は、映画製作において大きく二つの問題を産み落としてしまう。

第一に、構図の問題。従来のスクリーンでの仕事に慣れ親しんだ製作者の中には、画面の拡大で、構図の取り方に戸惑いを覚える者がいた。第二に、奥行き生成について。カメラに装着されたアナモフィック・レンズの影響で、パン・フォーカスが困難になってしまったのだ。以上の問題もあって、映画製作者は当初、横並びに人物を配置し、横長の空間を埋めることをしばしば選択した。

デイヴィッド・ボードウェルが物干し綱 (clothesline) ショットと呼ぶこの横並びのショットは、ハリウッドにおいても、スコープ映画時代に重宝され、頻りに観察されるようになる。発表では、我が国においても横並びの撮影法が印象的に展開されていたことを紹介するため、スタンダード版とスコープ版の両方が製作された1957年の『明治天皇と日露大戦争』(渡辺邦男監督)を例にとって、それぞれのヴァージョンの同一画面を比較して見せた。スタンダード版においては、肝心の人物が単一で映っているのに対し、スコープ版では、横にいる人物までが収められていることがその比較からわかる。同様の例は、他にも散見され、この映画の監督・渡辺邦男、あるいは、スコープ版カメラマンの渡辺孝は、一人だけを横長の画面にどうフレーミングしていいのかわからなかったのではないかと、常に何人かの人物を配してないと、拡大した空間を処理しきれなかったのではないかと、という感想を抱かせる仕儀だ。

ここでさらに分析を深化させる形で、両ヴァージョンで横並びの撮影法が採用されている場面を見比べてみる。すると、当然のことながら、スコープ版の方が横長の画面の特性もあって、視覚的に横並びの度合いが「過剰に」見えるのであり、この「過剰さ」が本発表で強調しておきたいキーワードであった。視覚的な「過剰さ」は決して「横並び」という特徴的な撮影方法にだけ確認された現象ではない。例えば、市川崑監督が『ぼんち』(1960年)のラストで見せたような演出にも当てはまる。すなわち、市川はそこでは画面のわずかな部分に光が差す障子屏を用意し、それ以外を真っ黒な「余白」で覆う。しかもその「余白」は、ワイドだからこそ「過剰に」見える「余白」である。横並びのように、空間を「埋める」のではなく、ここでは一転、空間を「空ける」演出もおこなわれており、その大胆な「余白」はワイドの特性によって「過剰に」映る。画面の小さなスタンダードではあまり印象には残らなかったかもしれない(それゆえ、市川崑は採用しなかったかもしれない)「余白」の創造が、ここでは、大きな画面によって増幅して、「過剰に」伝えられるのである。

こうした分析以外にも、当時盛んに議論されていた画面の拡大にともなうワン・ショットあたりの平均時間の変化についての調査結果や、懸案の奥行きの問題への製作者の対応についても言及した。

(きたうらひろゆき/国際日本文化研究センター)

支部・研究会だより 映像表現研究会

伊奈 新祐・奥野 邦利

映像表現研究会では、東部会と西部会合同によるインターリンク学生映像作品展: ISMIE を毎年開催しており、昨年度は第7回となるISMIE2013に21校が参加しました。加えて、作品推薦者による互選をもって、上位数作品をセレクト集DVDとしてまとめ、会員同士の情報交換も進めています。

今回のセレクト集作成にあたっては、意思表示のあった18校の作品の中から、投票数上位の6作品が選ばれました。セレクト作品は以下です。

大阪成蹊大学 芸術学部 『M(Y)E』 大菅敏之 / 4分00秒
 東北芸術工科大学 映像学科 『Henri』 前田結歌 / 3分11秒
 名古屋学芸大学 メディア造形学部 『少年たちが集まるとき』 菅森謙太 / 9分36秒
 東京造形大学 『時間から脱する為の装置』 大川リサ / 映像インスタレーション記録
 京都精華大学 芸術学部 『閉じた時間の環』 中村唯 / 10分00秒
 九州産業大学 芸術学部 『in the Television』 森政也 / 7分39秒

上記セレクト作品は、先の沖縄県立芸術大学での全国大会にて上映を行い、会員諸氏との意見交換の材料ともなっています。会場では、デジタルによってもたらされた新たな映像環境が、学生映像作品だからこそ、いち早く表現のレベルで可視化されているのではないかと行った議論がなされました。会場を提供くださった大会実行委員会の皆様、本当にありがとうございました。



尚、セレクト集作成に参加した作品は、YouTubeでISMIE2013と検索してもらえればご覧頂けます。

また、今年度もISMIE2014の開催を予定しております。7月後半を目処に、募集要項を関係各校に送信しますので、新たに参加意思をお持ちの場合には、以下の連絡先にご一報ください。

ISMIE2014 事務局
 日本大学芸術学部映画学科
 担当: 奥野邦利 / 野村建太
 e-mail: okuno.kunitoshi@nihon-u.ac.jp / nomura.kenta@nihon-u.ac.jp

〈ISMIE2014の東京会場について〉

今年度の東京会場のスケジュールは、10月後半の3日間を予定しています。日時及び会場については、現在調整しておりますので、追ってお知らせします。「上映+トーク or パネル」を計画しています。

(奥野邦利)

〈ISMIE2014の京都会場について〉

今年度の京都会場のスケジュールは、11/28(金)~11/30(日)の3日間を予定しています。

会場は昨年と同じ「元・立誠小学校 特設シアター」(今年度から「常設」となり、名称も「立誠シネマプロジェクト」に変更)において、<京都メディアアート週間2014>のプログラムとして「上映+トーク or パネル」を計画しています。

(伊奈新祐)

以上

(いな しんすけ/映像表現研究会「西部会」代表、京都精華大学芸術学部)
 (おくのくとし/映像表現研究会「東部会」代表、日本大学芸術学部)

支部・研究会だより 東部支部 奥野 邦利

東部支部報告と計画について

例年東部支部では、全国大会での総会終了後に、同じ会場をお借りして、支部総会を開催してきました。しかし、支部総会とは言え、時間的制約もあり、事実上会計報告のみの形式的なものでした。併せて、その都度、各大会実行委員会には運営面で余分な負担を強いることになっていた状況を鑑み、先般設置された幹事会において、会計報告、運営面での改善計画等を審議し、その内容の公正性を担保することとしました。

以下にその内容を報告します。

議事録

1：東部支部報告

*平成23年度より、会報の電磁化などの財政基盤が改善したことにより、東部支部では、研究発表費(約40万円)、運営費(約40万円)、合計(約80万円)の予算措置がなされるようになった。

*平成25年度決算では、研究発表費(¥111,869.-)、支部運営費(¥2,592.-)を支出した。

*例年の措置として、4月17日に次年度繰越金(10万円)を残し、これまで銀行口座に預金していた(¥655,680.-)を学会総務へ返金した。

*平成26年度も研究費(約40万円)、運営費(約40万円)、前年度繰越金(10万円)、合計(約90万円)の予算を計上している。

2：幹事会の設置について

*次期幹事会も引続き、理事のうち東部支部より選ばれた者によって構成される。

3：研究費について

*幹事会では、研究企画委員会と連携を取りながら、研究活動の振興及び新たな研究会の発足に努める。

*同じく幹事会では、東部支部研究会の使用項目や使用限度額等の運用方法を必要に応じて検討し、それを明文化する。

4：運営費の使用法について

*運営費については、無理に予算消化する必要はなく、これを柔軟に使用し、残金は年度ごとに学会本部へ返金する。

*東北、北海道地区への活動補助については、引続き検討をする。

尚、次期東部支部担当へは、支部活動(講演及びシンポジウム)を1年に1回は開催し、その際に東部支部所属会員のみなさんとの意見交換に努めるよう申送りたいと考えています。

(おくのくにとし/東部支部担当常任理事[第20期]、日本大学芸術学部)

支部・研究会だより ビデオアート研究会 瀧 健太郎

ビデオアート研究会報告と計画

本研究会は、ビデオアートのアカデミックな研究と、制作や展示現場のフィールドワークを交互に行なう方針で発足。前回、本誌の入稿直前でご報告できなかった第3回(3月開催)から映像学会大会直前の第6回(6月)までのビデオアート研究会の報告させて頂く。文献研究では、美学やメディア論の援用を行ないつつビデオアート研究の学術的アプローチの現存性に迫ることができた。フィールドワークでは国内外のビデオアート関係者から、先駆者による歴史的な状況から、起こりつつある政治的な背景でのビデオ性、美術市場におけるビデオアートの現状に到るまでアクチュアルな聞き取りを行なうことができた。報告の詳細は以下に。

第3回ビデオアート研究会

日時：2014年3月25日(火) 11:00 - 15:00

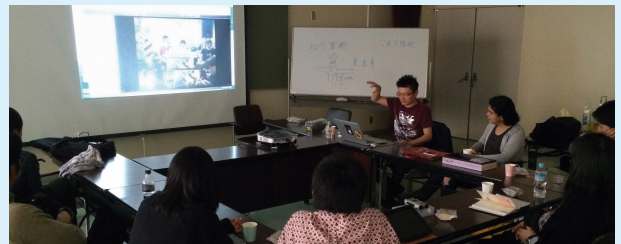
会場：東京大学駒場キャンパス 18号館 2階 院生研究作業室

内容：イヴォンヌ・シュピールマン「機器、自己反省、パフォーマンス」(『ビデオ 再帰的メディア』)におけるビデオアート研究の分析。第1回でのロザリンド・クラウス「ビデオ ナルシシズムの美学」分析から、更に近年のビデオアート研究としてシュピールマンの『ビデオ』から同じくヴィト・アコンチを扱っている章を抜き出し、分析・研究した。

パネリスト：河合政之(東京造形大学・東北芸術工科大学非常勤講師) / 角尾宣信(東京大学大学院総合文化研究科表象文化論博士課程) / 原島大輔(東京大学大学院総合文化研究科表象文化論博士課程) / 岸みづき(東京造形大学非常勤講師) / 進行：瀧健太郎(ビデオアートセンター東京代表)

第4回ビデオアート研究会

呉達坤氏によるレクチャーの様子



日時：2014年4月19日(土) 14:30 - 17:00

会場：渋谷労働福祉会館 2F 会議室 洋室1

内容：台湾關渡美術館チーフキュレーターの呉達坤氏(ウー・ダークン)をゲストに、氏が主宰する開催中の「AAA アジア・アナーキー・アライアンス」展とともに、展覧会の組織・参加作品に関する解説などをお聞きした。また折りしも台湾本国で起こった学生による立法院の占拠に関して、呉氏ほかAAA展に参加した作家たちが映像や音楽による支援を行い、それにより占拠と行政側の対応がインターネット動画サイトなどを通じ世界に発信されたことなど、時事性のある出来事と映像表現の実行力について伺うことができた。

パネリスト：呉達坤(ウー・ダークン、台湾關渡美術館チーフキュレーター)

<http://www.tokyo-ws.org/creator/w/post-285.shtml>

通訳：河合政之(東京造形大学・東北芸術工科大学非常勤講師) / 進行：瀧健太郎(ビデオアートセンター東京代表)

ミニ研究会：フィールドワーク・エクスカーション

日時：2014年5月2日(金) 16:00-17:30

会場：アーツ千代田 3331 内 モリユウギャラリー東京



モリユウギャラリー前での森氏によるレクチャー

映像テキスト分析研究会

中村 秀之

内容：ビデオアートのアート市場での現状を伺うべく、若手ビデオ作家展『VIDEOs』(5/2-5/10)開催の森裕一氏(モリユウギャラリー代表)をゲストにレクチャーを行なって頂いた。現代美術の文脈で、複製芸術であるビデオ作品がどのように流通され得るか、最新の動向など伺うことができた。

第5回ビデオアート研究会

日時：2014年5月24日(土) 13:00 - 16:00

会場：co-lab 渋谷アトリエ 2F 会議室3

内容：イヴォンヌ・シュピールマン「マトリクス現象」「ヴァスルカの習作」(『ビデオ 再帰的メディア』)からにおけるビデオアート研究の分析。第3回でおこなったイヴォンヌ・シュピールマンの『ビデオ』から、技術的知識がないと比較的難解とされる部分の読解を試みた。またシュピールマンがアコンチとの比較として取り上げているデニス・オッペンハイムの作品上映と分析を行った。



文献中で参照されているビデオアート作品を鑑賞

発表内容とパネリスト：

「デニス・オッペンハイムの作品について」 瀧健太郎 (ビデオアートセンター東京代表)

「マトリクス現象」(『ビデオ 再帰的メディアの美学』 p.107-110) 箇所について 河合政之 (東京造形大学・東北芸術工科大学非常勤講師)

「ヴァスルカの習作」(『ビデオ 再帰的メディアの美学』 p.110-114) 箇所について 角尾宣信 (東京大学大学院総合文化研究科表象文化論博士課程)

第6回ビデオアート研究会

マデロン・ホイカース氏によるレクチャーの様子



日時：2014年5月31日(土) 15:00 - 17:00

会場：co-lab 渋谷アトリエ 2F 会議室3

内容：マデロン・ホイカース氏を迎え、70年代オランダビデオ黎明期から現代までについてレクチャー。来日中のオランダのビデオアートの先駆者、マデロン・ホイカース氏に1970年代当時のオランダのビデオアートにまつわる状況や、制作パートナーのエルザ・スタンスフィールドとのコラボレーションについてなど制作背景について参考作品上映と併せて研究会で伺った。

パネリスト：マデロン・ホイカース (ビデオ・アーティスト)

http://www.madelonhooykaas.net/

通訳：碓井千鶴 / 進行：瀧健太郎 (ビデオアートセンター東京代表)

今後の計画について

今後も月に一度のペースで、ビデオアートを学術的に研究する試みと、制作や展示現場を現地調査する形を、交互に行ない研究会を進めてゆきたい。

また研究会参加者による成果報告として、論考または冊子の編纂にむけて、より充実した研究会の開催を目指す。

以上。

(たきけんたろう / ビデオアート研究会代表、ビデオアートセンター東京)

映像テキスト分析研究会の2014年度第1回(通算第10回)研究発表会を、下記のとおり開催いたしました。

日時：2014年4月12日(土曜日) 14:00-19:15

会場：立教大学池袋キャンパス本館(1号館)1203教室

発表者①：河野真理江 (立教大学大学院現代心理学研究科映像身体学専攻博士後期課程)

表題：『君の名は』論—「すれ違い」メロドラマの通俗性とマゾヒズムについて
発表者②：中村秀之 (立教大学現代心理学部映像身体学専攻教授)

表題：歴史の関を越える—『虎の尾を踏む男達』(1945/1952)の神話・事実・寓意

参加者：25名(発表者を除く)

2010年7月に第9回を開催して以来の研究発表会でしたが、今回も熱気あふれる会になりました。対象となる場面を必要なだけ上映し、映像テキストの詳細な分析をおこなうという本研究会の趣旨にそって、2名の発表者が十分な時間を費やして発表しました。発表を受けて、多くの参加者から活発な質問、批判、コメントが相次ぎ、発表者も丁寧に応答して、結果として予定時間を大幅に超えるセッションとなりました。たいへん中身の濃い研究会でしたが、進行方法と時間管理については若干の課題を残したかもしれません。両発表者はそれぞれ、今回の発表を博士論文または著書の一部に組み込むことを予定しています。本研究会での充実した議論が、いっそう高い水準の研究成果に寄与することが期待されます。

以下に、開催告知の際の発表概要を再録します。

河野真理江「『君の名は』論—「すれ違い」メロドラマの通俗性とマゾヒズムについて」

1950年代から1960年代にかけて、「すれ違い映画」と呼ばれた映画群は、日本映画における「メロドラマ」のなかでもとりわけポピュラーな存在であったと言える。映画『君の名は』が、その先駆的かつ象徴的な作品であることは疑いようがない。しかしそうした大衆文化史的な重要性のみならず、『君の名は』は、日本映画に限定されないメロドラマ映画、とりわけすれ違い(missed meeting)を主題とする作品が持つ強力な通俗性を考慮するうえでも、興味深い問題を提示する。この映画は、賞賛であれ、非難であれ、あらゆる観客の感情を動揺させ、なんらかの強い印象を惹き付けた。本発表では、『君の名は』三部作のテキスト分析を通じて、メロドラマ映画におけるこのような通俗性が、登場人物のマゾヒズム的なパフォーマンスや、それを観る観客のマゾヒズム的な経験と関連している可能性について議論する。

中村秀之「歴史の関を越える—『虎の尾を踏む男達』(1945/1952)の神話・事実・寓意」

黒澤明の『虎の尾を踏む男達』が撮影中に敗戦を迎え、完成後もGHQから上映を禁止されて公開まで数年を要した事情は、監督自身の著作『蝦蟇の油』の内容が「事実」と見なされ、そのまま流布してきた。しかし、その記述の肝心な点のほとんどは他の当事者の証言や同時代の記録と食い違っている。本発表の前半では、複数の関連資料にもとづいて「神話」を解体し、特に製作の開始は「八月十五日」以後の可能性がきわめて大きいことを示す。次いで、このようなコンテキストを踏まえて『蝦蟇の油』の当該部分に徹底的読解を施し、映画『虎の尾を踏む男達』との間テキストの連関について仮説的な視点を提示する。そして発表の本体である後半では、具体的なテキスト分析を通して、この映画に特有のイメージの運動全体が天皇や国家をめぐる「寓意」的な解釈に開かれていることを論じる。

(なかむら ひでゆき / 映像テキスト分析研究会代表、立教大学現代心理学部映像身体学科)

支部・研究会だより

映像心理学研究会・アニメーション研究会

横田 正夫

日本映像学会 映像心理学研究会・アニメーション研究会
合同研究発表会開催のご案内

青葉の候、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、日本映像学会東部支部 映像心理学研究会・アニメーション研究会の合同研究発表会を下記の如く開催いたします。

参加申込みに関しては文末をご覧ください。どなたでもご参加いただけますので、是非ご出席くださいますようお願い申し上げます。

日本映像学会東部支部

平成 26 年度 映像心理学研究会・アニメーション研究会合同研究発表会

日時：2014 年 7 月 6 日（日）1:00～5:30

会場：日本大学文理学部百周年記念館会議室 2

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

(<http://www.chs.nihon-u.ac.jp/access/>)

第 1 部 映像心理学研究会

1:00～2:00

「ポイント・ライト・ウォーカーを使った、アニメーションの動きの解析と評価について」

野村建太会員（日本大学芸術学部映画学科）

要旨

人体を 10 数個の点によって表現すると、点の運動だけで人体の運動を知覚させることができます。

この点によって人体を表現したものを、「ポイント・ライト・ウォーカー」と呼びます。

アニメーションの作画は従来、感覚的に評価されることがほとんどでしたが、作画されたキャラクターを「ポイント・ライト・ウォーカー」に変換し、解析することによって、客観的に作画を評価することが出来るのではないかと考えました。

本発表者が大学で勤務していることから、数名の学生が作画したアニメーションを素材にして、動きの解析を試みます。

2:10～3:10

「仮現運動の長短二分法をアニメーションの実際の作画に照らし合わせたとき見えて来るもの」

片瀬須直会員（日本大学）

要旨

昨年 5 月の日本アニメーション学会大会でのシンポジウムで、おおよそ以下のような問題提起を行った。

「アニメーションの実作上の表現の背後にあるはずの基本原則を明確化することで、それぞれの表現の意味合いを明確に言語化することを目指したい。しかしながら、アニメーション制作の実作者の側も、アニメーション教育に携わる教育者の側も、実作上の経験則に偏重して、そうした基本原則を明確なものとして多く持ち合わせていないように思える。そのことで適切な言語化が妨げられることがあり、結果としてアニメーションの作品表現全体の中での『動き』を評価する部分が必要以上に小さなものとなってしまっているのではないか」

これが契機となって、アニメーションの「動き」について専門的に研究する立場の方々と我々実作者の立場とのあいだで意見交換を行う機会を設けていただけようになり、そうした場を通じていくつかの知見を新たにすることができるようになった。

特に、いわゆる仮現運動は SRAM と LRAM という認知機構の異なる二種類に分かれるのではないか、という二分説に接することができたことは大きな刺激となった。これまでの実作を通して経験則として持ち合わせていたことと、符合する部分が多いように思われたのである。

今回は、この仮現運動二分法によって、実作者である自分自身がどのように納得する部分を得たか、その上でさらに浮上して来た疑問点にどのようなものがあるのかを提示してみたい。それをもち今後の「アニメーションの動きについての掘り下げ」がさらに活発なものなることを願えれば、と思う。

第 2 部 アニメーション研究会

3:20～4:20

「東映動画株式会社に関する産業史的研究—1960 年代後半から 70 年代を例に—」
木村智哉氏（ゲスト）（日本学術振興会 特別研究員）

要旨

東映動画株式会社についての歴史記述では、1972 年前後を一つの転機とする

ことが多い。創業者である大川博の死去、80 分規模の長編製作の継続的製作中断、一般的に長期の「ロックアウト」として知られる「事業所閉鎖」、後年有名になる一部人員の他社への流出、テレビアニメ『マジンガー Z』のヒットに伴う商品化権ビジネスの躍進などといった要素が、その認識を構成していよう。

しかし本報告では、そうした転機に至る経緯とその結果とを、むしろ連続したものとして捉える。そして 60 年代後半から 70 年代にかけての東映動画の経営改革の推移を、独自の調査を行った各種資料を基に、同社のアニメーション製作会社としての特質を表出したものとして分析する。

またこれにより、主として作品と人員の面から東映動画の変容を捉える、既存の歴史記述とは異なる視角を提示したい。

4:30～5:30

「クリエイターを目指すには、技術以前に教養と知識を身に付けるべし」

黒田昌郎会員（アニメーション監督）

要旨

急速なデジタル科学の進歩に、学生は技術の習得を目指すことに執着します。しかし、その前に、もっとアナログ的な感性を磨いて欲しいと思います。

道具を使う前に、その道具が無い時にはどうやっていたのか？

アナログ世代の人間の歴史と、過去の作品に、あるいは、なまな作品…演劇、音響、絵画に触れて生な感動を体感して欲しいと思います。歴史の中の時代、知識を教養として身に付けることからスタートして欲しいと思います。

アニメーションの本質、本来動かないものに、動きを与え、命（魂）を吹き込むという手法であるというスタートに立ちたい。

静止画のキャラクターの魅力、台詞に頼るストーリーの魅力に頼る事無く、動きの中で伝える作品を志向して欲しいと思います。

会場アクセス

京王線「下高井戸」あるいは「桜上水」駅下車、徒歩 8 分

<http://www.chs.nihon-u.ac.jp/access/>

■参加申込

どなたでも参加できますが、資料作成の都合上、7 月 4 日（金）までに下記までお申し込み頂けますと助かります。

■参加申込・問合せ先：

日本大学文理学部心理学研究室（横田正夫）

E-mail: myokota@chs.nihon-u.ac.jp

Tel: 03-5317-9720 Fax: 03-5317-9427

（よこた まさお／映像心理学研究会・アニメーション研究会代表、
日本大学文理学部）

支部・研究会だより

映画文献資料研究会

田島 良一

第 3 4 回映画文献資料研究会（7 月 2 6 日）開催のお知らせ

日本映像学会映画文献資料研究会では下記の如く研究会を開催いたします。会員の皆様のご参加をお待ちしています。

記

日 時：2014 年 7 月 2 6 日（土）1 5 時～1 7 時

場 所：日本大学芸術学部江古田校舎東棟 2 階 E204 教室

西武池袋線江古田駅下車 徒歩 5 分

発表者：冬樹 薫氏（映画史家）

テーマ：「戦前池袋映画街の形成と小林商会池袋撮影所」

今回は戦前の池袋を知悉している映画史家の冬樹薫氏をお招きし、

貴重な資料を交えながら、これまでの研究成果を発表して頂きます。

問合せ先：日本映像学会映画文献資料研究会代表 田島良一

日本大学芸術学部映画学科内

TEL 03-5995-8220・8944

支部・研究会だより 西部支部

中村 滋延

(1) これまで会報への報告をしそびれていた 2013 年の 11 月の西部支部主催の映像展について報告します。

日本映像学会西部支部映像作品展『映像：イメージ・ウェスト 2013 (Image West 2013)』を 11 月 19 日 (火) ~ 11 月 24 日 (日) ギャラリーおいし (福岡市中央区天神新天町) にて開催。

期間中、井上貢一、伊原久裕、今城明夫、岩田敦之、瓜生隆弘、黒岩俊哉、佐藤慈、高山譲、中村滋延、程珊の会員作品、及び会員推薦の学生作品 (6 作品) を上映・展示した。

19 日にはオープニング・イベントとして「舞踏と映像のパフォーマンス」(舞踏：原田伸雄、映像：黒岩俊哉) を上演した。

22 日には作品展の一環としてシンポジウム「映像作家とは何か—あるいは映像芸術のアイデンティティ/出品作家を迎えて」と題して、井上貢一の司会の下、黒岩俊哉、佐藤慈、中村滋延がトークとディスカッションを展開した。

作品展・シンポジウムを通して西部支部所属の会員たちの創作活動を互いに認識することが出来、かつ地域の人々にその活動をアピールすることが出来る絶好の機会となった。研究会とは銘打たなかったものの、実際には研究会としても有効に機能した。

(2) 西部支部では年に 2 回の研究会を前期 6 月、後期 12 月に行ってきた。特に前期研究会はイメージフォーラム・フェスティバル福岡の期間中にイメージフォーラム出品作家 1 名を講師に招いて講義を行っていたが、今年度は諸事情によって開催を見送った。その分後期研究会を充実したものに行いたいと考えている。

(なかむら しげのぶ/西部支部担当常任理事 [第 20 期]、
九州大学大学院芸術工学研究院)

支部・研究会だより 中部支部

伏木 啓

◎中部支部報告

中部支部では、9 月 27 日 (土) に第 1 回研究会を計画している。

講演では、情報アーキテクトを専門とされている渡邊英徳氏を招き、氏が実践されているアーカイヴプロジェクトについてお話いただく。現在のメディア環境における「データ・アーカイヴ」「データ・ヴィジュアルイゼーション」について議論を深める場を期待している。

2014 年度中部支部第 1 回研究会

日時：9 月 27 日 (土) ※時間は調整中

会場：静岡産業大学 S S U 磐田駅前学舎

〒 438-0078 静岡県磐田市中泉 497-1

(JR 磐田駅北口徒歩 2 分、天平のまち 4 F)

TEL 0538-37-0161

http://www.ssu.ac.jp/department/management/facilities_ekimae.html

研究発表：調整中

ご講演：渡邊英徳氏

(情報アーキテクト、首都大学東京システムデザイン学部准教授)

<http://labo.wtnv.jp/>

主催：日本映像学会中部支部

共催：静岡産業大学

詳細は、中部支部 HP に掲載する。

<http://jasias-chubu.org/wp/>

以上

(ふしきい/名古屋学芸大学メディア造形学部映像メディア学科)

ショートフィルム研究会

林 緑子

事業報告並びに研究計画

—東海地方における映像文化の受容促進について—

2013 年度研究会活動助成の交付を受けて、ショートフィルム研究会では下記の内容・日時で企画を開催いたしましたので、ここにご報告いたします。また、2015 年 3 月末までの活動として、以下 4 件の開催を計画しています。

継続中の企画報告

第 3 回活動

会期名 名古屋フィルムミーティング 2014 (第 4 回) 告知・作品募集活動

期日 2014 年 1 月から継続中

主催 日本映像学会ショートフィルム研究会

共催 名古屋フィルムミーティング実行委員会

内容 名刺と、告知・作品募集チラシを制作し、周知活動を行っている

主旨 東海地区での学生と一般の映像制作を盛り上げる交流の場として、公募作品による上映会を開催する。

公式 HP http://filmm.info/nfm_main/

大学や教育機関の卒業制作展などで学生の方に、作品募集の旨を口頭にて周知活動を開始している。周知活動に使用するため、名刺、チラシ、パンフレットを制作した。

開催予定の企画概要

第 6 回活動

会期名 林勇気 線と記憶とてざわりについて

期日 2014 年 7 月 12 日 (土) ~ 7 月 18 日 (金)

内容 映像インスタレーション展示 + トークレクチャー

会場 シアターカフェ

〒 460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目 32-24、マエノビル 2 階

主催 シアターカフェ

共催 日本映像学会ショートフィルム研究会

主旨

1997 年より映像作品の制作を始めた林勇気氏の展示上映とトークレクチャーを行う。林氏は、自身で撮影した写真データを、パソコンのソフトで編集し、アニメーションを制作してきた。デジタル感を残しつつも、手作業のあとを感じられるような作風で、現代社会におけるデジタルのあり方をあらわしている。また、短編アニメーション作品として、映画祭での上映もさかんに行ってきた。今回、林氏の制作と活動について、展示上映とトークレクチャーで紹介する。

■林勇気氏プロフィール

1976 京都生まれ 1997 映像の制作をはじめ 宝塚造形芸術大学講師 日本映像学会会員

【個展】

2009 neutron tokyo (東京)

2008 世田谷ものづくり学校 IID gallery (東京)

ギャラリー播 (京都)

2007 gallery neutron (京都) ※ 08、09 にも開催

2004 ギャラリー三条 (京都) ※ 05、06 にも開催

【主な映画祭】

2008 Indie AniFest 光乱の交差点 (韓国)

animation soup / HEP HALL (大阪)

2007 イメージフォーラムフェスティバル / 新宿パークタワー (東京)、

北海道立近代美術館 (北海道)、他

ASK? 映像祭 / art space kimura ASK? (東京)

2006 トロント・リール・アジア国際映画祭 (カナダ)

イメージフォーラムフェスティバル / 新宿パークタワー (東京)、

愛知県芸術文化センター (愛知)、他

2004 ニッポン コネクション (ドイツ・フランクフルト)

バルセロナアジア映画祭 (スペイン)

2003 ソウルビデオフェスティバル 林勇気プログラムで特集上映 (韓国)

ソウルフリンジフェスティバル (韓国)

アジア・アメリカ国際映画祭 (アメリカ主要都市を巡回)

ナッシュビル国際映画祭 (アメリカ)

香港国際映画祭 (香港)

2002 高雄国際映画祭 (台湾)

バンクーバー国際映画祭 (カナダ)

イメージフォーラムフェスティバル / 新宿パークタワー (東京)、

横浜美術館 (神奈川)、他

【主な受賞】

2006 AMUSE ART JAM / 準グランプリ 受賞

トロント・リール・アジア国際映画祭 / Most Innovative Film or

Image Arts and Sciences 167 (2014) , 9-10
 中部支部ショートフィルム研究会

- Video Production Award 受賞
- 2002 イメージフォーラムフェスティバル / 審査員特別賞 受賞
- 1999 動楽映業・アニメーション実験映像劇場 / 香山リカ賞 受賞

第7回活動

会期名 飯塚貴士監督による映像制作ワークショップ(仮)
 期日 2014年10月以降で2日間(土日祝)
 内容 映像制作ワークショップ
 参加費 1500円(2日間/予定)
 定員 10名(予定)
 会場 シアターカフェ
 〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目32-24、マエノビル2階
 主催 シアターカフェ
 共催 日本映像学会ショートフィルム研究会

フィギュアや人形、ミニチュアセット等を使用し、人形劇と特撮映画が合わさったような短編映画を制作している、飯塚貴士監督の映画制作ワークショップを開催する。屋内の様々な場所を使用し、人形主体の映像作品として、ストーリー構成から撮影までをグループで行う。アナログな手法による人形劇映画の制作方法を学ぶことを通じて、1本の短編映画ができるまでを体験してもらう。

■飯塚貴士氏プロフィール

1985年生まれ。2008年、地元・牛久市でワッペンフィルムスタジオを立ち上げ、インディペンデント映画制作を行う。人形とミニチュアセット、昔ながらの特撮技法を用いた作風が特徴で、監督、脚本、撮影、美術、音楽、登場人物の声をほぼ一人でやっている。主な作品は「エンカウンターズ」「GREATROMANCE」など。

第8回活動

会期名 名古屋フィルムミーティング2014
 期日 2014年10月12日(日) 午前～午後
 内容 上映、交流会
 会場 愛知芸術文化センター 12階スペースE・F
 主催 日本映像学会ショートフィルム研究会
 共催 名古屋フィルムミーティング実行委員会
 主旨

東海地区での学生と一般の映像制作を盛り上げる交流の場として、公募作品による上映会を開催する。
 公式HP http://filmm.info/nfm_main/

第9回活動

会期名 JJJOによる上映・公演+トークレクチャー(仮)
 期日 2014年12月以降
 内容 上映・公演、トークレクチャー
 会場 シアターカフェ
 〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目32-24、マエノビル2階
 主催 シアターカフェ
 共催 日本映像学会ショートフィルム研究会、
 主旨

短編アニメーション作家・鋤柄真希子氏と、人形操者・坂東綾子氏による、上映・公演ユニット JJJOの公演+トークレクチャーを行う。

以上

(はやしみどりこ/ショートフィルム研究会代表)

ショートショートフィルムフェスティバル&アジア 大阪2014

<上映プログラム(予定)>

	7/18(金)	7/19(土)	7/20(日)	7/21(月・祝)
10:30~12:10	受賞プログラムA	受賞プログラムB	受賞プログラムC	受賞プログラムD
12:40~14:20	アカデミー賞プログラム	スイス特集	カンヌプログラム	台湾・高雄映画祭プログラム
14:50~16:30	韓国・アジア国際短編映画祭プログラム	マエストロ&セブリティイショート	フランス映画祭	フットボールプログラム
17:00~18:40	受賞プログラムC	受賞プログラムA	受賞プログラムD	受賞プログラムB
19:10~20:50	地球を救え！プログラム	ROBOT ショートフィルムプログラム	マエストロ&セブリティイショート	初音ミクフィルムプログラム

※ 受賞プログラムは、オフィシャルコンペティション等の受賞プログラムから選定された作品を上映します。
 ※ 上映時間は、招待監督等のアフターイベントの開催により、変更する場合があります。

Image Arts and Sciences 167 (2014) , 10

編集後記

総務委員会

■去る6月7-9日、沖縄県立芸術大学で本学会第40回大会が盛況のうちに開催されました。同大学をはじめ大会関係者の皆様にご感謝申し上げます。編集者も参加して様々なカテゴリーの研究発表から刺激を受けましたが、スケジュールの合間に立ち寄った那覇市牧志のミニシアター「桜坂劇場」では、大手シネコンと一線を画す上映作品の多様さに加え、演劇・音楽・レクチャーなどの活動も盛んで、映画館が地域コミュニケーションの核となっているありように感銘を受けました。(石坂)

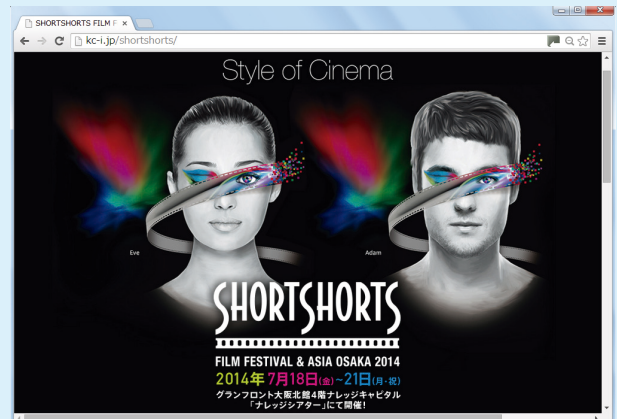
FORUM

Image Arts and Sciences 167 (2014) , 10

フォーラム

事務局

■ショートショートフィルムフェスティバル&アジア 大阪2014(後援)



<開催概要>

開催日程:2014年7月18日(金)~21日(月・祝)
 ※1日5回、計20回上映予定
 開催会場:グランフロント大阪北館4F ナレッジキャピタル「ナレッジシアター」
 料金:1日入場券500円(税込)
 主催:一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社KMO
 企画・統括:ショートショート実行委員会
 協力:一般社団法人グランフロント大阪TMO、MBS
 協賛:メルセデス・ベンツ日本株式会社、docomoOSAKA (NTTドコモ)、宝酒造株式会社、RF1(アール・エフ・ワン)、株式会社堂島スウィーツ
 後援:大阪府、大阪市、公益社団法人関西経済連合会、一般社団法人関西経済同友会、大阪商工会議所、公益財団法人関西・大阪21世紀協会、大阪デジタルコンテンツビジネス創出協議会、一般社団法人デジタルメディア協会、一般財団法人デジタルコンテンツ協会、日本映像学会、特定非営利活動法人映像産業振興機構、FM802、FM COCOLO、FM OSAKA
 URL:<http://kc-ijp/>
 一般お問い合わせ先:06-6372-6530(受付/平日10:00-18:00)

「ショートショートフィルムフェスティバル&アジア(SSFF&ASIA)」は、新しい映像ジャンルである「ショートフィルム」を日本に紹介するため、米国俳優協会(SAG)の会員でもある俳優の別所哲也により1999年に東京で誕生し、2014年で16周年を迎えます。2004年には米国アカデミー賞公認映画祭に認定され、アジア最大級の国際短編映画祭へと成長しています。大阪では、ナレッジキャピタル開業1年目の2013年からナレッジキャピタルが主催し、パイオニア精神、グローバルな視点、洗練された価値創造、完成作品を観る人がわくわくあふれるなど、ナレッジキャピタルのコンセプトと親和性の高い映画祭として開催しています。

今年は「Style of Cinema」をテーマに、『ショートショートフィルムフェスティバル&アジア 大阪2014』では、約20の国と地域から集められた作品から、1日5つのプログラム、約70作品を上映します。この70作品の中には、ナレッジキャピタルの独自プログラムとして「ROBOT ショートフィルムプログラム」と「初音ミク ショートフィルムプログラム」の2つを、本映画祭で上映します。

また、ナレッジキャピタルならではのショートフィルム鑑賞スタイルの提案として、1F「カフェラボ」では、7月1日(火)から7月21日(月・祝)までの期間限定で、今の自分の心にほしい感情を満たすドリンクとショートフィルム視聴がセットになった「ショートショートセット」を販売します。映画を見て、心が動かされる「元気」「怒」「泣く」「恋」「笑う」を表現したドリンクと、そのテーマに添ったショートムービーをタブレットでご覧いただけます。

ナレッジキャピタルでは、この映画祭の5年成長ビジョンを掲げ独自性をさらに発展させることを目指しています。本映画祭を通じ、大阪・関西からショートフィルム鑑賞文化の普及によるムーブメントを起こすという「文化発信」「国際交流」に加え、今後は、映像表現、映像創造等のコンテンツビジネスの事業化による「産業創出」や、その分野における「人材育成」を推進し、映像コンテンツにおける新たな価値を付加して発信してまいります。(6月17日付プレスリリース資料より)

以上